



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

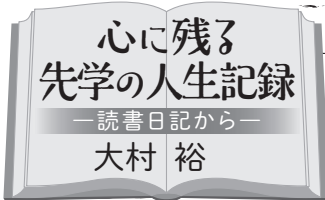
# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.245

2024.2.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強みにバックアップする企業です。



第38回

## 『近藤義郎古稀記念 考古文集』

(考古文集編集委員会 1995年)

本書は、岡山県に拠点を持つ「考古学研究会」を創設し、長らくその代表として運営をすると共に、岡山大学に考古学講座を創設し、多くの後進を育てた近藤義郎氏(1925~2009)の古稀記念文集である。近藤義郎氏と親交のあった後学や教え子の想い出話および短編の論文・「着想」などに加え、教え子たちとの対談記事・退官後の「日録抄」が収載されている。ちなみに私は、「近藤義郎」については、その人柄の実際についてはよく存じ上げない。ただ、かの「月の輪古墳」の大衆的発掘を組織し、立派な報告書を作り上げた彼の求心力と実務能力については常々敬服しているところである(拙著「続 日本先史考古学史の基礎研究」六一書房 参照)。この「文集」に寄稿した人数が総勢133名に上っているところからも、彼を慕う後学がいかに多いかを知ることが出来る。そこに描かれている近藤氏の一面は、形式に捉われない庶民的な学者ということになるのか。ここでは、上記の対談記事および「最終講義」(?)で話された「僕の発掘遍路」を中心に、近藤義郎氏の生涯をたどってみたい。

近藤義郎は1925(大正14)年2月に栃木県足利市に生まれる。生家は絹織物工場を営んでいたということである。尋常小学校卒業後、商業学校に入学。父親は近藤に家業を継がせるために、あえて商業を学ばせようとしたらしい。ここを4年10か月で繰り上げ卒業した後、東京外国語学校ヒンドゥスターニー語部に進学。この学校に入ったのは、当時大日本帝国はマレー半島を制圧しており、この地域の語学専攻の需要が極めて高かったからだという。この学校では週20時間外国語学習をするのであるが、12時間は英語、8時間がヒンドゥスターニー語であったという。英語を十分に学べたのは近藤にとって幸いなことであった。1945(昭和20)年3月ここを卒業後、ほどなくして入営(5月)。ところが7月頃から慢性下痢となって福岡の農家の離れで終戦を迎えることになる。復員してからは20歳で「英語学校」を開いたり、『和文英訳の工夫』という本を共立出版社から出版したりしている。それで、今でいうと「百万」という単位で収入を確保したという。この資金をもとに京都大学に進学したのである。むろん父親は大反対であったというが、「自分の金で進学するのだから勝手にさせてくれ」と言って、入学試験に臨む。京大を選んだのは「試験が楽だと思った」からである。実際、「こんなに易しい問題で入れるんだとしたら、馬鹿ばかり集まるんだろうな」と思ったという(この感想は、鈍才の私には受け入れ難い)。ところが、彼は考古学というのは何をやるのか分かっていなかった。子どもの頃からぼんやりとした性格で、先々を見通して行動するタイプではなかったらしい。だから、「あそこへ入ると誰でも博士になれる」と思って漠然と進学したというのだ。目端のきくものは利にさとく、次々に進路や信念を変えてしまう傾向があるが、近藤のような性格は、困難な状況下でも信念を曲げず、志を継続出来るという点において、却って考古学に適格と言えるのか。

学部2回生のとき、東京大学人類学教室の山内清男の知遇を得、縄文土器の教示を受けている。ちなみに、山内が近藤に語った、「粗製土器が君、大事だよ」というアドバイスが理由となったのか、卒論は縄文晩期の粗製土器をテーマとしている。同教室の助手の酒詰仲男や和島誠一と交流が始まったのもこの頃である。また和島と入れ違いに同教室の助手となった中島寿雄(形質人類学者)と知り合ったことは、近藤の運命を大きく変えることになる。中島は岡山大学医学部に赴任する折、同大学に人類学教室(考古学分野も含む)を創設する腹積もりがあったようで、その助手として当時京大大学院でくすぶっていた近藤に声をかけてくれたのであった。

岡山大学医学部助手となった近藤は、1953年、かの「月の輪古墳」(岡山県棚原町飯岡所在)の発掘を延べ約1万人の大衆を糾合して敢行する。この時近藤はわずか28歳であった。この発掘調査がすごいのは、発掘前から地域住民と月の輪古墳周辺の「悉皆調査」を開始し、勉強会・研究会・講演会・幻燈説明会を展開して発掘の意義や目的を地域住民と共有する努力をしていることである。しかも発掘後、多くの協力者を得て、見事な報告書を作り上げている(『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会 1960年)。この事業は、地域住民の心に深く印象付けられたようで、今でも毎年夏に「月の輪祭り」が開催されているということである。

近藤が大学教員時代、主体的に取り組んだ発掘は116回であった。そして特に調査が終わった時の満足感を味わったのは「月の輪」のほかは岡山県楯築弥生墳丘墓の発掘(1976~1989年の間に9回)だったという。両者とも、資金が足らずにカンパ箱を現場に置いていた。この他学史に残る発掘を多数敢行しているわけだが、近藤の実施する発掘は予算が乏しいことが多かった。「食うや食わず」の状態で発掘を続けたことも一再ならずあったという。近藤自身も若い頃は貧しかった。助手時代は教授の給料の5分の1だったというし、住んでいた住居は、友人の坪井清足が「こんなところに人が住んでいるのか」とあきれられる程であったという。そうした苦しい家計をやり繰りして考古学研究会の運営資金も供出していたのである。まさに庶民の目線で物事を捉えることが出来る研究者であった。ただし、イギリス留学から帰国した1970年以降、様子が変わったらしく、地元の人たちとの間に亀裂が生じている。自身の意識の変化もあったが、1969年に激化した大学紛争で学内の状況も人心も変わってしまったことに対する苛立ちもあったようである(春成、2022: 4頁)。それはともかく、困難な状況をものともせず自ら研究環境を整備し、全国的規模の研究会を運営する一方、反核運動等にも関わり、すぐれた報告書や多数の著作(『前方後円墳の時代』、『日本考古学研究序説』など)を著した近藤義郎先生は、やはり比類がない学者であったと思う。

参考文献: 春成秀爾 2022「和島誠一先生を想う」『利根川』44号

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第38回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第238回)	和氣清章 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第13回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚「遠野物語」	土屋和章 …4

## 考古学の履歴書

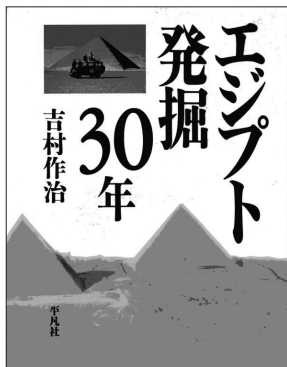
## 考古学とともに歩む(第13回)

山本 暉久

## 13. 大学院での考古学 その2

## -エジプト・マルカタ遺跡の調査に参加①-

1971(昭和46)年4月、大学院2年生となったこの年は、自身の考古学人生にとって大きな調査を迎えた年となった。それは、早稲田大学初(わが国初)のエジプトでの発掘調査に参加することになったことである。エジプトでの調査の始まりは、1966(昭和41)年、その当時、第一文学部の学部生であった吉村作治さん(早稲田大学名誉教授、現・東日本国際大学総長)が中心となって、5人の学生たちによりエジプト・ナイル川流域のゼネラル・サーベイ(遺跡踏査)が行われたことに始まる。その経緯については「エジプト発掘30年」(吉村作治著 平凡社、1996)に詳しい(写真参照)。



▲吉村作治著 平凡社刊 1996.11

この学生たちの調査を学問的に支えたのが当時文学部講師であった川村喜一先生(早稲田大学文学部教授、1978年12月逝去)であった。こうした経緯をへて、いよいよエジプトの地で遺跡の発掘調査を実施する計画が持ち上がり、1970(昭和45)年、早稲田大学古代エジプト調査委員会(委員長・平田寛 早稲田大学教授)が設立されることとなった。発掘調査地点の選定は紆余曲折があったが、最終的に、地中海から800キロメートル南、古都テーベ(Thebes 新王国時代の首都)があった現在の都市ルクソールのナイル川西岸にあるマルカタ(南)遺跡に決定された。

私は、エジプト考古学とは、これまで無縁であり、その方面の学問的素養は皆無であったが、これまでの国内での発掘経験が買われて、早稲田大学古代エジプト調査隊の一員に選ばれたのである。調査隊のメンバーは、隊長・川村喜一(エジプト考古学)、隊員は、中島健一(文学部教授・歴史地理学)、櫻井清彦(考古学)、稲葉和也(講師・建築史)、吉村作治(第一文学部美術史学専修卒・エジプト考古学)、山本暉久(考古学)、内藤良夫(学部生・考古学)の7名であった。その当時の派遣計画書を見ると、調査テーマは、(1)ルクソール郊外のマルカタ遺跡の発掘調査、(2)ルクソール地区諸遺跡のゼネラル・サーベイ、(3)先王朝時代に関する資料蒐集、と記されている。主な調査目的は、エジプト古代文明がどのように成立したかを解明するためにマルカタ遺跡を発掘し、先王朝(Pre-Dynasty)時代の遺跡を見つけることにあった。ただ、そのような調査目的が達成できるかは、試掘したわけではないので、発掘してみないことにはなんともいえないことはいまでもないことであった。王朝時代の遺跡調査はこれまで欧米をはじめ長い歴史があり、それに対抗するにはまだまだ力量不足であったことも、そのような調査テーマが選ばれた理由でもあった。

現地での発掘調査の成果やエピソードなどについては、次回に触れることとして、ここでは、出発前までの準備の様子

について触れてみることにしたい。このエジプト調査については、自身が「エジプト調査日誌」として3冊のノートに書き記したものが手元に残っている。それをみると、1971(昭和46)年5月18日には、調査隊の打ち合わせが始まっており、6月22日には、調査委員会が開催され、派遣計画書が配布され説明がなされている。調査費は、当時の「文部省科学研究費海外学術調査補助金」が650万円交付され、それとともに寄付金を募り、総額1200万円が当初予算として当てられた。こうして発掘機材等を早急に準備し、9月初めに船便でエジプト・アレクサンドリアへ送ることとなった。この間の調査日誌をみると、連日、各メーカーに物品(文具ほか)・食品などの寄贈を依頼しまくっているのがわかる。とにかく、予算の足りない分はなんとか、寄付金以外に、現物の寄贈を受けようと、連日かけずり回ったのである。食品では、インスタントラーメンをはじめ、さまざまなメーカーに掛け合っていたことが記されている。幸い、その努力の甲斐あって多くの現物を手にいれることができた。今思うと、まるで「物乞い」のようなありさまであった。また、現地で用いる車は、いろいろお願いはしたが、結局、多少割り引かれた代金でジープを購入することとなった。かくして、発掘機材や食品・文具などをコンテナに梱包したものを横浜港から9月中旬に船便でアレクサンドリアに向けて送り出すことができた。発掘調査が決定してから、なんとも慌ただしい夏休みを過ごした。

ルクソールは、東岸にカルナック神殿やルクソール神殿が今も建ち並び、西岸に渡ると、ツタンカーメン王墓が発見されたことで知られる「王家の谷(Kings Valley)」(新王国時代の岩窟王墓群)があることで有名である。我々が発掘するマルカタ(南)遺跡は、グレコローマン時代に建立されたイシス女神を祀った神殿(ディール・アル・シャルウィート)が遺存している地であった。

こうして、初めての海外調査の参加、かつ、早稲田大学初の古代エジプト発掘調査という機会に恵まれ、はたしてどのような遺構・遺物が検出されるのか、ワクワクした気持ちを抱いて出発することとなった。吉村作治さんが先発し、そのあと、先遣隊として、現地での受け入れや準備のために、私と内藤良夫(共立女子第二高等学校教諭)隊員は、11月15日(月)17時出発予定のエジプト航空MS863便にて、マニラ、バンコック、ボンベイ(現・ムンバイ)、ドーハを経由して、現地時間7時20分カイロ空港着の予定で、羽田空港を発ったのである。

## 略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月~1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月~2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英次記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月~2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。



## U レーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 238

## 片部・貝蔵遺跡と前方後方墳群 ～三重県松阪市～

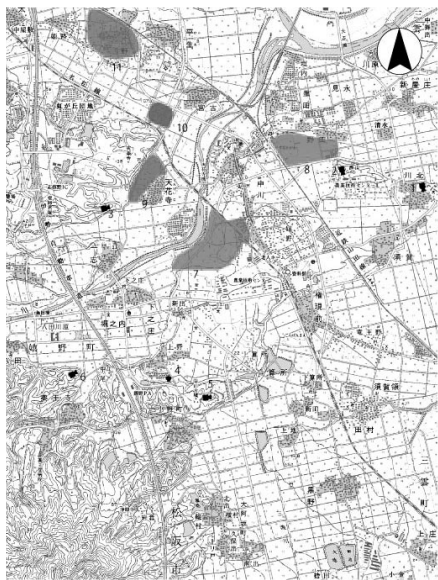
和氣 清章

三重県松阪市は平成17年に1市4町が合併し、新松阪市になった。その北部に位置する、旧嬉野町や旧三雲町は多くの遺跡が所在する。

### 中村川流域の前方後方墳群

旧嬉野町では、国史跡の天白遺跡・向山古墳が存在し、縄文時代以降の遺跡が多数存在する。こうした遺跡は三重県の中央部を流れる雲出川の支流中村川両岸に点在する。

特に、今回紹介する片部・貝蔵遺跡は古墳時代を中心とする遺跡である。中村川流域の古墳は、3世紀後半から4世紀後半の前方後方墳が4km前後の範囲に造営される。この前方後方墳の内、向山・筒野・鏑山古墳の3基は大正時代に豊地村が郷土史作成のために調査された。この内、向山古墳、筒野古墳は、後藤守一氏による「伊勢国豊地村の二古墳」に聞き取り調査の



▲図1：中村川流域周辺の遺跡位置図

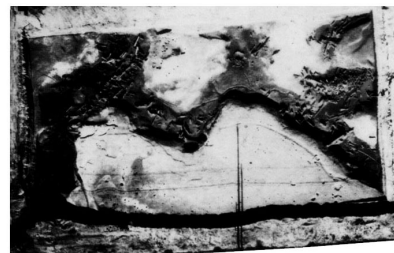
報告が行われた。報告においては、向山古墳や筒野古墳は、不時発見とされたが、平成14年から町内の歴史資料悉皆調査を実施した嬉野史編纂調査で、向山古墳、筒野古墳、鏑山古墳の3基の古墳を調査したメモが確認された。向山・筒野古墳については、後藤氏が作成した報告の内容と同一であり、古墳が郷土史編纂のために調査されたことが確認された。このうち昭和60年に、範囲確認調査が実施された鏑山古墳が含まれており、主体部から鏡や剣が出土したことが略測図とともに確認された。

### 片部・貝蔵遺跡の調査

今回紹介する、片部・貝蔵遺跡は前述した5基の前方後方墳中、中村川右岸の独立丘陵上にある、西山1号墳北側の平野部に所在する遺跡である。この遺跡の調査は、平成2年に中川駅周辺土地区画整理事業に伴い発掘調査された。しかし、昭和62・63年に実施された遺跡詳細分布調査では、水田上面に土器の散布は見られず、遺跡包蔵地には含まれていなかった。しかし、開発範囲が57haと広大な範囲であり、試掘調査を実施しその有無について確認を行った。この結果、地表下1m前後に縄文時代から中世に至る遺構が確認できた。平成5年から、順次発掘調査を実施した。

この片部遺跡の調査は、平成5年から調査を実施した。平成7年の調査では4世紀初頭の墨書土器が出土した。片部遺跡は

2世紀～4世紀に、東西に蛇行する幅16m、深さ1.5m前後の流路とその周辺に広がる水田跡が確認されている。平成7年の調査では、その16mの流路に、複雑な水路が確認されるとともに、堰や堤などが確認される灌漑施設であった。墨書土器は流路内の出土遺物で、流路内の土器に他の時期が含まれないことから、4世紀の墨書とした。



▲片部遺跡3次

しかし、4世紀に倭国の中で、漢字が使用された例が存在しないことから、その成分について検討する必要があり、堀場製作所のご理解のもと、度々とマイクロアナライザーによる分析を行った。しかし、炭素という普遍的な元素は検出されるものの、墨書箇所と他の部位との大きな差を見いだすことができなかった。これは、片部遺跡の資料のみならず、奈良・平安時代の墨書も同様の結果であった。理化学的分析においては複数の資料の分析をし、データベースの構築が必要であることを痛感した。

墨書土器の展示は、新聞発表後、翌日より町の資料館で展示を行い、極力、解説をおこなった。この中には、嬉野出身で就職し北海道から20年ぶりに帰ってきた方や、現在フランスに住み、祖父から、豊地村の田園風景の話聞いており、一度は来訪したいと思っていたが、今回NHKの海外ラジオで話を知り、初めて訪れたという、高齢のご婦人がおられた。ご婦人の祖父と考えると、江戸時代に生まれた方からの話と考えられる。地域の歴史を調査することは、今住んでいる人たち以外にも、その土地に関わった多くの人々に対しても、責務が発生していると痛感した。



▲片部墨書土器



▲貝蔵墨書

その後、片部遺跡3次調査直後に開始した、貝蔵遺跡の調査では、多数の北陸系の土器が出土する土坑の確認や、片部遺跡へ連なる溝など、2世紀の後半段階から3世紀にかけての流路を主体とした集落跡が確認された。こうした土器内には、やはり3世紀の墨書土器や2世紀の墨書土器が含まれるとともに柱穴が1mを超える大型掘立柱建物確認されるなど、多くの成果が得られた。遺跡の発掘調査は、調査ごとに新しい歴史が確認される。その調査結果は、過去の人の生活やその人々の思いを刻んだものでもある。そうした遺跡を捉えるためには、調査者が、「古を考え楽しむ学問」として遺跡に直面し、人の生活や意味を考えなければならぬという重要性を教えてくれた遺跡が片部遺跡や貝蔵遺跡であった。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは乾哲也さんです。

## 考古学者の書棚

## 「遠野物語」

柳田国男 著／新潮社(1992)、(初版1910)

土屋 和章

## 1 突然のきっかけ

「ねえ、遠野物語では何番が一番好き？」

いきなりそう問われたら、皆さんはちゃんと答えられるだろうか。相手は、ほぼ初対面である。突然のことに、驚いてうまく答えられなかったのをよく覚えている。

柳田国男の著書『遠野物語』は明治43年(1910)に出版された。民俗学のみならず、考古学関係者においても、その存在を知らない人はいないだろう。

私も、なぜか毎秋になると何気なく頁をめくり斜め読みをしていた。しかし、突然に冒頭のような問いを突き付けられると、確かに何番が好きかという態度で本書にはのぞんでいなかったと、はたと気づかされた。

## 2 『遠野物語』にみる考古学的な記録

改めて『遠野物語』を読み返してみた。この本の文体は独特で、筆者の柳田による聞き書きのはずだが、いつの間にか一人称の体験譚の語り口を呈し、読者自身もその体験に引き込まれるという不思議な感覚を味わう。

考古学を学んだ者としては、まず112番に関心が向く。112番は、ダンノハナ、蓮台野、ホウリヤウという地についての記載である。ダンノハナは昔館のあった時代に囚人を斬った場所で、村境の丘の上だそう。この立地は、他の村々の同名の地とも共通しているらしい。

蓮台野の近隣には星谷という地があり、蝦夷屋敷と呼ばれる四角くくぼんだ所が多くある。その痕跡は極めて明白で、多くの石器、蝦夷銭という渦紋が施された径2寸ほどの土製品が出るという。蝦夷屋敷は、竪穴建物跡などの遺構が完全に埋没せずに地表から観察できるものであろうか。石器や渦紋を持つ円形の土製品の出土、東北地方であることから推察すると縄文時代中期の遺構だろうか。

蓮台野の土器と比較すると、ホウリヤウから出土する土器は、模様などは巧で様式が全然異なると記される。また、ホウリヤウからは埴輪(ママ)や石斧石刀、丸玉管玉も出土している。文様に技巧を凝らした土器に人の形をした土製品や石刀が伴う描写は、亀ヶ岡文化を想起させる。

## 3 序文を読む

『遠野物語』に描かれる時間のあり方については、新潮文庫版にある吉本隆明の才筆に詳しい。吉本は、「今は昔…」で語り始めるスタイルは、説話が積もって出来上がる平地の農耕社会の物語の定型だという。山地では人々が遊動的であるため伝承は「積もらない」ので、「昔々こういうことがあった」という物語はできにくいというのだ。

…いったい、どういうことか。

この見解に触れ、しばらく自分の思考が麻痺したのを覚えている。そして、自分なりに次のように解した。農耕社会と遊動社会では、時間の感覚が違うのではないか。いや、もっと言えば本日現在あたかも同じ空間に存在していると感じる様々の物事は、ひとつの時間軸の上にあいつつ、個別の時間軸も持っているのではないだろうか。

そんな複層的な時間のあり方をアリとしつつ、『遠野物語』の序文を読んでみる。

日は傾きて風吹き酔いて人呼ぶ者の声も淋しく女は笑い児は走れどもなお旅愁を奈何ともする能わざりき。盂蘭盆に新しき仏ある家は紅白の旗を高く揚あげて魂を招く風あり。峠の馬上において東西を指点するにこの旗十数所あり。村人の永住の地を去らんとする者とかりそめに入りこみたる旅人とまたかの悠々たる霊山とを黄昏は徐に來たりて包容し尽したり。

私は『遠野物語』の中で、この下線の部分が最も好きである。筆者の柳田が遠野を訪れたのは8月末のことで、早稲と晩稲の熟し具合の差によって田ごとに色を違えているような風景であった。峠の馬上にある筆者の視点から、次の4つの時間のあり方が簡潔に示される。

- ①この世から去っていく村人(生者から死者への転換、または生という時間の終わり)
- ②今現在に軸足を置く旅人(筆者の主観的な視点)
- ③悠々たる霊山(遠い過去から遠い未来まで不変の、しかし始まりも終わりもある存在)
- ④徐にやってくる黄昏(反復しながら過去から未来へ継続する無限の存在)

しかし、読めば読むほどこれを時間として捉えていいのかわりに感じる。これら①～④は時間というよりは、むしろ存在そのものの違いではないだろうか。この一文からは、カレンダーに表せるようなひとつの時間軸に併行して、個々の存在そのものが内包する時間のあり方が併存していると感じ取れる。

## 4 遺跡と調査者の関係

柳田が序文で示した存在の対比は、遺跡と調査者の関係に似ている。

過去における土器の文様の変化、遺構の切り合いなどは、それ自体が個別のイベントとして存在した。また、これらとは独立に土砂は堆積し土層を形成する。このように、過去においては、土器の文様の変化と突然の洪水とは、互いに独立な事象である。しかし、現代においては、発掘調査者はこれら過去の事象を平面的・断面的に観察して関連付け、関係性を見出す。

柳田の序文は、この関連付けの作業を簡潔に過不足なく完成させている。私たちが、過去の人々の生活を描くためには、当然のように個別の要素を再構成するという手続きをとっている。そのプロセスの中で個別の要素は(肯定的な意味で)人間味を失うこととなる。その後、私たちが個別要素の関連付けから歴史を編む際に、再度いくらかの人間味を加えようと試みるとき、柳田が『遠野物語』で示したような手法がひとつのヒントなのかもしれない、とも思うのである。

ちなみに、冒頭の問いかけをした人物のお気に入りには99番、私の序文以外のお気に入りには97番である。

## アルカ通信 No.245

発行日 2024年2月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801  
 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp  
 URL : http://www.aruka.co.jp